
綺麗な箱

江室 美佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綺麗な箱

【Nコード】

N3157J

【作者名】

江室 美佳

【あらすじ】

とてもとても大切な、美しい箱。

その箱には何が入っていたのか、すっかり忘れてしまった。

本当に、大切なものが入っているはずなのに

どうしても開けられない箱を何故かは分からないけれど、ずっと大切に持っていた。

鍵もない。もちろん、鍵穴も錠前もない。開け方も分からない。何が入ってるのかも知らない。その綺麗な大切な箱は、堅く堅く閉ざされていた。

でも、何かとても大事なものが入ってるような気がしていた。とてもとても大切な、とてもとても貴重な、とてもとても価値のある、何かが。本当の中身は分からない。

その箱はとても美しく、魅力的だった。その箱さえあれば、何もかも満たされた。そこにあるだけで、他には何も必要ないように思えた。それ以外のものを求めることもなかった。大切な大切な、美しい箱。だから、その箱を捨てることも、壊すことも出来なかった。だから、ずっと大切に持っておくしかなかった。

けれどある時、何が入っているのかがどうしても気になって、その箱をどうしても開けたくなくなった。

こんなに大切にしてきたのだから、こんなに綺麗な箱なのだから、何かその箱以上に綺麗なものが、何かその箱以上に価値のあるものが入っているに違いない。ずっとそう思い込んでいた。それなのに、中に何が入ってるのかどうしても分からない。分からない。

一体何が入ってるのか？大切な箱の中に入っている、大切なものは何なのか？開けてみたい。中身が知りたい。

でも、とても大切にしてきた綺麗な箱だから、壊すのは嫌だった。でも開けたい。大切な美しい箱に入っている、箱以上に大切な美しい何かをどうしても見てみたい。

思い切って、嫌で嫌で仕方ないけれど、壊してみようか。箱を揺さぶって耳を当ててみても、物音は一つもしない。もしかしたら、何も入っていないのかもしれない。けれど、何か必ず入っている。重みを感じる。何も入っていないことはない。きつと、何かが入っているに違いない。

長いこと考えた後の行動。

思い切り足下に打ち付けた。思い切り。カ一杯に。自分が持てる全ての力と、期待と願いを両腕に込めて。

瞬く間に、箱は大きな音を立てて粉々になった。

粉々になってしまった、大切な綺麗な箱。その瞬間は、胸が痛くて仕方なかった。本当にずっと大切にしていた。いつでも。何処でも。そしてこれからもずっと大切に持つておくつもりだった。それなのに、たった一瞬でその箱は粉々になった。まるで自分までもが全て粉々になってしまったように感じた。後悔が、黒い大きな影になって一瞬で自分を覆っていくのを感じた。けれど、それよりも箱に入っていたものの正体が知りたいという気持ちの方が、ずっとずっと強かった。

その箱に入っていたものは、なかった。中には、何も入っていないかった。

砕け散った綺麗な箱の散り散りになった欠片の中。そこにあるはずの、その箱の中身。何もなんでも、おかしい。ありえない。目を凝らして探し回ったけれど、どれだけ探してもそこにあるのは、大切な箱の小さな欠片だけ。

どうして？

ああ、思い出した。この美しい箱は、元は普通の箱でしかなかったんだ。

美しく飾り立てたのは、過去の自分。目一杯、綺麗に飾り立てた。自分だけのものにしたくて、綺麗に綺麗に、飾り立てたんだ。とても魅力的に思えたのは、飾り立てた自分が、とても一生懸命で、その努力がその箱の装飾の中に見えたから。だから当たり前のようにとても美しく、とても魅力的で、とても大切だったんだ。箱の中身がないことも、その時は分かっていたのに、そうやって飾り立てているうちに、その中身までもを自分で作り上げていたんだ。それで満足していたんだ。

箱の中身などに捕らわれずにそのまま大切に持っていれば、ずっとずっと満たされていて、幸せだったかもしれない。きっとそうだったのに。

粉々になった箱の欠片をどれだけ拾い集めても、決して元通りにはならない。美しい箱は、もう二度と戻ってはこない。

そこに残ったのは、後悔。大切なものを失った自分。大切なものが何一つない。ここにいても、仕方がない。

そして、溶けた。

(後書き)

付き合って3年。お互いに惹かれ合って、当たり前のように交際を始めた。

一緒にいるだけで満たされていた。彼がいつも、自分の傍にいてくれる。それだけで良かった。他には何も要らない。彼さえいてくれれば生きていけると、馬鹿みたいだけど真剣に思ったりもした。

本当に幸せだった。彼と共に過ごして、一生を終えようと密やかに心に決めていた。そして、彼も自分と同じように思っているのだと、信じていた。実際、何度も彼とその思いを確かめあっていたから。

けれど、いつからか彼の気持ちが変わっていった。一緒に住んでいたけれど、会話を交わすことも、視線がぶつかることさえもない。そんな日が幾日も重なっていく。会話をしても、彼が楽しそうな表情を浮かべるのは稀なこと。耐え難い重み。息が出来ない。陸に上がった魚みたいにもがくしかない。

信じていても不安になる。彼に尋ねても、返ってくる言葉はもはや形式的なものでしかなく、聞き慣れた言葉を機械的に繰り返すだけだった。虚しいことだと分かりながらも、その言葉を信じてもがき続けるしかなかった。

彼が家に帰ってくる日が、目に見えて少なくなっていく。彼のない部屋で繰り返す、空虚な自問自答。あんなに幸せだったのに、こんなに好きなのに。 どうして？

ドアの開く音。真夜中の暗闇から、現れる彼。いや、違う。何か違う。

ああ、これは愛していた彼とは違う。全く知らない別の誰か。彼の姿をした、誰か。

返して。あの彼を。返して。

両腕に力を込めた。

彼が眠っている。その表情も、私の彼とは違う。憎悪と悲しみに満ちた、今までに見たことのない、彼の表情。

どうして？どうして返してくれないの？何処へ行ってしまったの？どうして帰って来ないの？

彼と私が過ごした、幸せな日々を象徴する部屋。あの彼と私だけのもの。二人だけのもの。全て持っていこう。何一つ残さないように。その中で、眠る。

こうして寄り添って眠るのも、久しぶり。こうしていられるのが幸せだったのに。何も求めなければ、ずっと傍にいれたかもしれないのに。

彼の気持ちなんて、最初から分かってた。他に愛している人がいる。それを分かかって、一緒にいることを求めた。この部屋も、本当は私だけの部屋だった。初めから、何もなかったんだ。

彼と、ようやく本当に一つになれた。

空に伸びる、炎に照らされた煙。醜く汚れた、黒い煙。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3157j/>

綺麗な箱

2010年10月14日09時18分発行